様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　6 月　15 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０１００
研究課題名（和文）　英国モダニズム美術の形成と展開に関する総合的研究

研究課題名（英文）　A Comprehensive Study on the Formation and Development of English Modernist Art

研究代表者
要　真理子（KANAME MARIKO）
大阪大学・コミュニケーションデザイン・センター・招へい准教授
研究者番号：４０４２０４２６

研究成果の概要（和文）：本研究は、20 世紀初頭に展開した英国モダニズム美術の動向について、制作、批評、歴史的かつ同時代的影響といった局面から検証したものである。国内外の作品・資料調査に加え、シンポジウムや講演等における海外共同研究者との議論から、英国モダニズム美術の造形的特徴が大陸的影響にも増して、アジアからの影響を受けたものであることが明らかになりつつある。その成果については、既に複数の学会で発表したほか、今後も冊子およびシンポジウムで公開する予定である。

研究成果の概要（英文）：This study examines the modern art movement in England in the 1910s and 1920s, focusing on the works, criticisms, and contemporary or historical influence of Wyndham Lewis (1882−1957), an artist, and Roger Fry (1866−1934), an art critic. I would argue that the common formal characteristics of most English modernist art was influenced by those of mainly Chinese (Southern Sung's) art—a view emerging from discussions with overseas collaborators at several symposia or lectures, as well as from research on various artworks and documents. The integrated results of this study are to be published after the progressive stages have been presented at the meetings of academic societies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・美学美術史
キーワード：英国、モダニズム、批評、ヴォーティシズム、フォーマリズム、ブルームズベリー・グループ、線、アジア

１．研究開始当初の背景
研究代表者はこれまで、とくに 1910 年と 1912 年に英国で行われた二つのポスト印象派展を中心に、ロジャー・フライの批評理論

に基づいて、この展覧会に出品した当時の英国の若い画家たちがフランスのポスト印象派をどのように受容し、これを発展させてきたかを研究してきた。本研究開始時点では、王立美術アカデミーに対抗する新興勢力として、とくにブルームズベリー・グループについて、すでに以下に示すような複数の研究報告を行ってきた。
(1) フライの批評と造形理論を読解すると同時に、それが個々の作品のフォームにどのように実現されているか、英国の若手作家ヴァネッサ・ベル、ジェイコブ・エプスタインらの作品をフライの批評を参照しつつ比較検討した（平成 12 年待兼山芸術学会）。
(2) オメガ工房のような社会的活動を視野に入れながら、英国美術やデザインが大陸の新しい芸術運動を取り入れていく過程を明らかにしていった。（平成 14 年、16 年意匠学会、平成 14、16、18、20 年国際デザイン学・デザイン史会議）。

その一方で、英国モダニズムの一潮流とされるヴォーティシズムとその中心人物ウィンダム・ルイスに関しては、平成 19 年に、彼が参加した「第二回ポスト印象派展」、「20 世紀美術展」、および「テュロスと肖像画展」（1921 年）に関する調査を行い、カタログや資料の一部を入手した（平成 19 年 4 月から平成 20 年 3 月、鹿島美術財団助成による「美術に関する調査研究」）。

海外における最近の研究動向としては、ロンドンで 2 度、大規模なルイスの回顧展が行われた。平成 16 年に、コートールド美術研究所で、スレード美術学校時代から晩年にいたるルイスの素描が展示された。この展覧会を記念して、同美術研究所からは、ジャッキー・クライン編著、*The Bone beneath the Pulp*（Courtauld Institute of Art Gallery, 2004）が、テイト出版からはリチャード・ハンフリー著、*Wyndham Lewis*（Tate Publishing, 2004）が刊行された。平成 20 年の夏には、ナショナル・ポートレート・ギャラリーで “Portraits by Wyndham Lewis” が開催された。二つの企画展を組織したバース・スパ大学教授ポール・エドワーズ氏は、ルイス研究の第一人者であり、本科研課題の海外共同研究者として、関連研究の最新動向や一次資料の入手方法などの情報入手のための支援ばかりでなく、研究代表者が提示した新たなテーマに関して発展的な道を開いてくれた。

２．研究の目的
本研究の目的は以下の通り――
(1) 英国モダニズム美術において重要な潮流のひとつであるヴォーティシズムとその主導者ウィンダム・ルイスを扱い、彼が美術界で果たした役割をとくに造形的局面から考察すること。
(2) ルイス周辺の造形運動（ブルームズベリー・グループ）を射程とし、これらの影響関係について同時代の批評や資料に基づいて検討すること。
(3) 上述の二つの調査を通じて、英国モダニズム美術を通底する特質や造形的思考の源流を確認したうえで、最終的には、他の欧米諸国とは区別される英国モダニズム美術運動の全容を解き明かすこと。

３．研究の方法
(1) 平成 21 年度は、夏季と冬季に、作品調査および資料収集を行った。8 月、ロジャー・フライの油彩画、およびフライと彼が組織したポスト印象派展の関連資料について、オルセー美術館（仏）、コートールド美術研究所（英国）で、ウィンダム・ルイスの作品に関して、サウサンプトン美術館、リーズ大学図書館（英国）で調査を行った。さらに、英国図書館、テイト・アーカイヴにおいて資料収集を行った。2 月、ホワン・マルク財団（スペイン）主催展覧会「Wyndham Lewis」、およびエドワーズ氏の記念講演に参加した。本展覧会は、平成 20 年夏季に開催されたナショナル・ポートレート・ギャラリーの同名の展覧会の規模をさらに拡張し、画家ルイスの生涯が概観できるように工夫されており、展示資料・作品数と質、いずれも充実したものであった。

(2) 平成 22 年度は、夏季と冬季に作品調査および資料収集を行った。8 月、ブルームズベリー・グループの芸術に関して、2008 年 12 月からアメリカの 13 大学の美術館を巡回した大規模な回顧展 “A ROOM OF THEIR OWN: THE BLOOMSBURY ARTIST IN AMERICAN COLLECTION”の展示作品・資料調査をペンシルヴェニア州立大学パーマー美術館（米）で行った。展覧会を組織した同大学准教授クリストファー・リード氏の講演に参加し、当日、意見交換を行った。12 月、ヴォーティシズム、ブルームズベリー・グループの作品・資料調査をフレンド図書館、英国図書館、V&A 美術図書館、テイト・アーカイヴ（英国）で行った。さらに、ブルームズベリーのデザインを商品化した企業、ローラ・アシュレイの社内アーカイヴを訪問し、資料調査に加えて、同デザインに対する現代英国一般の関心の度合いを確認し、同グループのデザイン活動の現代的意義を検討した。
(3) 平成 23 年度は、6 月と冬季に作品調査お

よび資料収集を行った。6 月、テイト・ブリテンで開催されたシンポジウム Repositioning Vorticism に参加した。同シンポジウムでは、先述のエドワーズ氏をはじめ、ウィンダム・ルイス・トラストの年報の編集を担当するアラン・マントン、美術批評家リチャード・コックスなどヴォーティシズム研究で著名な研究者のほか、*Modern Art in Britain 1910- 1914*（Merrell Holberton, 1997）の著者として知られるレディング大学教授アナ・グルツナー・ロビンス氏も講演を行い、英国モダニズム美術の最新の研究動向が提示された。このシンポジウムは、2010 年 9 月から米・伊・英を巡回した展覧会 "The Vorticists: Rebel Artists in London and New York, 1914-18"を総括して開催されたものである。その一方で、英国モダニズムのもう一つの潮流、キャムデンタウン・グループに関して、The Fine Art Society（英国）主催の展覧会、ブルームズベリー・グループの活動に関しては、ブライトン美術館（英国）の展覧会 "Radical Bloomsbury"を見学・調査した。2 月、エドワーズ氏とケンブリッジとロンドンの二か所で会合し、本研究の進捗状況や展望について議論した。ケンブリッジでは、共に、Kettle's Yard Gallery のヴォーティシストの作品を見学し、ロンドンでは、テイトの 展覧会"Picasso and Modern British Art"およびレクチャーに参加した。エドワーズ氏は講演のゲストスピーカーであった。

４．研究成果

(1) 研究期間内の得られた成果

中間報告として、意匠学会、国際美学会、アジア芸術学会、アート・ドキュメンテーション学会で口頭発表を行ったほか、学会誌、大学研究紀要において論文を発表した。また、書籍『イメージ』上下巻にも調査内容の一部が反映されている（とくに上巻第 5、6 章、下巻第 5 章）。

(2) 研究成果の同時代的意義

研究代表者が指摘した英国モダニズム美術に通底する造形的特徴については、すでにフライの"Line as a Means of Expression in Modern Art" in *Burlington Magazine*,（1918-19）やルイスの *The Caliph's Design*,（1919）、*The Role of Line in Art*, a limited edition, 1930s の論考を比較検討することで、線と構成において認められると解釈していたが、それらの源泉として、アジア的表象が挙げられることを今回の調査研究で確信した。英国では、大英博物館が中心となって、20 世紀初頭の国内外の影響関係を考察するプロジェクトが始動しており、実際、ルパート・リチャードによる調査報告、*Modernism and the Museum*（Oxford University Press）が 2011 年に刊行された。ただし、このプロジェクトの核心は、20 世紀初頭のモダニズムの中心に大英博物館を位置づけることにあり、個々の作品の造形的影響関係を探ることではない。個別の作品の造形性（アジアの美術作品との影響関係）に関しては、やはり、エドワーズ氏による先行研究、*Wyndham Lewis: Art and War*（1992, pp.40-41）の言及の以外に参照すべきものはない。この先行研究を手掛かりとして、さらに、日本美術とヴォーティシズムの関連についても調査を開始した。このテーマは、以下に挙げる②、③に関わるものである。

(3) 今後の展望

本研究の成果の一環として、

①英国モダニズム美術と宋の山水画の関係については、平成 24 年 7 月 19 日にニュルンベルクで開催される第 33 回国際美術史学会第 18 分科会 *The Absence of Object and Void* で "Remarks on 'Emptiness' or 'Interval': Modernism and Orientalism"のタイトルもと口頭発表を行う。

②平成 26 年秋季に立命館大学と京都精華大学でエドワーズ教授を招へいし、講演ならびにシンポジウムを計画している。

③その折、上述の講演内容とモダニズム研究論文をまとめたデジタルメディアと図書の刊行を検討している。

しかしながら、本研究は、成果公開によって終了となるわけではない。共同研究者のエドワーズ氏を通じて知遇を得た英国イーストアングリア大学の教授デヴィッド・コルベット氏とも現在さらなる共同研究を模索中である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① Mariko Kaname, 'Is logical analysis adaptable for art criticism? : A comparison between Russell and Fry', *Aesthetics*, 査読有, No.13, 2009, 121－130, http://wwwsoc.nii.ac.jp/bigaku/aesthetics_online/aesthetics_13/no13top.html

② Mariko Kaname, 'The Dwelling Place of Memories', *The Journal of Asian Arts & Aesthetics*, 査読有, Vol.3, 2009, pp. 53－58

③ 要　真理子、「ロジャー・フライによる子どもの制作物へのまなざし：３つの児童画評を手掛かりとして」、『成安造形大学紀要』、査読無、第 2 号、2011、41－56

④ Mariko Kaname, Shigeru Maeda, ‘Considering Aesthetic Communication Mediated by Images: the Case of “Remoscope”’, *Aesthetics*, 査読有, No.15, 106－115, http://wwwsoc.nii.ac.jp/bigaku/aesthetics online/aesthetics_15/text/text15_kanamemaeda.pdf

⑤ 要　真理子、「Laura Ashley archive room――ブルームズベリー・コレクション 1987 を中心に――」『研究者資料のアーカイブズ――知の遺産　その継承に向けて――』予稿集、査読無、2011、20－23

⑥ 要　真理子、「ステイタス・シンボルとしてのデザイン」『成安造形大学紀要』、査読無、第 3 号、2012、95－104.

〔学会発表〕（計 4 件）

① Mariko Kaname, The Dwelling Place of Memories, The 7th International Conference of the Asian Society of Arts, October 17, 2009, Xiangfan University/China

② Mariko Kaname, Shigeru Maeda, Considering aesthetic communication mediated by images – the case of “Remoscope”, The 18th International Congress of Aesthetics, August 9, 2010, Peking University/China.

③ 要　真理子、「ヴォーティシズムにおける vortexの理念とデザイン：『Blast』を手掛かりとして」、意匠学会、2010年8月1日、関東学院大学／横浜

④ 要　真理子、「Laura Ashley archive room――ブルームズベリー・コレクション 1987 を中心に――」、アート・ドキュメンテーション学会、2011 年 11 月 26 日、東京大学／東京

〔図書〕（計 4 件）

① 岡林洋、大森淳史、仲間裕子編、神林恒道、萱のり子、丸山果織、石原みどり、清原佐知子、前田茂、潘示番、大西弘祐、福田知子、田野葉月、田中圭子、池田祐子、潮江宏三、斎藤稔、要 真理子、大久保恭子、三浦信一郎、尾鼻崇、渡辺浩司、高安啓介、石黒義昭、田之頭一知、戸高和宏、立野良介、岩﨑陽子、竹中悠美、三木順子、桑島秀樹、川田都樹子、村上敬、今井真理、篠木涼著、『芸術はどこから来てどこへ行くのか』晃洋書房、2009、総頁数531頁、分担「The Calligraphic Line: ロジャー・フライと中国美術」、231－242

② 神林恒道監訳、仲間裕子、大久保恭子、要 真理子、竹中悠美訳、『韓国近代美術の百年』三元社、2011、総頁数327頁、分担、205－288

③ 前田 茂、要 真理子共編著、『イメージ（上）　イメージとは何か』ナカニシヤ出版、2011、総頁数122頁

④ 前田 茂、要 真理子共編著、『イメージ（下）　イメージと私たち』ナカニシヤ出版、2012、総頁数126頁

〔その他〕

① 要　真理子、「ロジャー・フライのヴィジョン概念をめぐる考察」、現代芸術研究会、2009 年 9 月 17 日、杉並区セシオン第 5 会議室／東京、招待講演

６．研究組織

(1)研究代表者　要　真理子
（KANAME　MARIKO）
大阪大学・コミュニケーションデザイン・センター・招へい准教授
研究者番号：40420426

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：